

美術の窓(118)

水中展覧会AQUART

大和文華館館長 浅野秀剛

私が水中展覧会AQUARTのことを初めて知ったのは三年前である。それは文字通り、水中に作品を展示し、それを、潜って、または泳ぎながらシュノーケルを使って、それが叶わなければ、船の上から、あるいは水中観光船で鑑賞するのだという。正直なところ、そういう奇抜な展覧会が成立するのか、正確に言えば、鑑賞者が満足するレベルの作品が展示されるのか、そして、それらの作品は、地上に設置され鑑賞される作品と、存在の魅力が本質的に異なるのかという疑問が湧いた。何人かの友人に話すと、概ね同様の感想を持ち、なかには、奇抜すぎてどうもという人もいた。しかし、考えてみると、美術作品というものが、物そのものから、空間の設計にまで広がり、鑑賞の場が、王侯貴族の邸宅、荘厳な建物、美術館といったものから、街や農村、海浜・島というように、多様な空間に広がったことを思えば、水中というのも当然視野に入るという思いもあった。

私は、念願叶って、この夏の8月19日から21日まで、AQUARTに参

加した。会場は鹿児島県奄美大島の瀬戸内町嘉鉄沖の水中である。嘉鉄は遠い。幸いにも夏季は、伊丹空港から一日に二便も奄美行があり(羽田からは一便のみ)、奄美空港までは1時間半余で到着するが、そこから、大島南端に位置する嘉鉄までは、80キロ、車で2時間かかる。空港でレンタカーを借りるのが普通で、そうでなければ、ホテルに迎えの車を頼まなければならない。バスは、乗り継げば、一日がかりでようやく到達できる状況という。私は幸いにも主催するメンバーが借りたレンタカーに同乗させていただくことができた。私のホテルは、嘉鉄から車で10分のヤドリ浜にあるマリンステーション奄美である。主催者メンバーは、嘉鉄にあるネプスダイブリゾートとマリンステーション奄美に分かれて宿泊していた。ネプスダイブリゾートには10人余しか泊まれないのだ。

19日の夜は、嘉鉄小学校校庭でAQUARTの上映会があり、翌日は、嘉鉄小学生を対象とした見学ツアーがあって、私も参加させていただいた。見学ツア

ーは、父兄や地域の人も参加する大掛かりなものであった。会場までは、船で行くしかない。エンジン付きの船はもとより、シーカヤックやグラスボートに分乗して600〜700メートル沖合の海上に行き、ダイビングかシュノーケルで展示品を見るのである。私も、子どもたちに混じって救命胴衣を着け、シュノーケルで全作品を見ることができた。泳ぎながら海中を覗くのである。慣れてくると、幻想的な異空間に身を置いた感覚になり、爽快感すら覚えて夢中になった。しかし、海流に逆らって移動したため、船に上がると全身の疲れを覚えた。昼食は、メンバーや地域の人が作ってくれたカレーライスをご馳走になった。21日は水中観光船「せと」での鑑賞である。その船は珊瑚を鑑賞するための船であるが、展覧会の期間中(今年は8月21日〜25日)は、日に一回、AQUARTの会場にも特別に立ち寄るのである。その日は約60人の乗客で満員であった。AQUARTを見た後、珊瑚礁の見学となるが、まだまだ自然の作り出したそちらの方が魅力的で、その日も海亀が時々出演してはその度に歓声が上がった。

水中展覧会が、地上展覧会と本質的に異なるのか、別の魅力を現出させることができたの

かという点について、即座に結論を出すのは難しい。ただ、水中を覗きながら移動すると、次第に新たな人工物が見えてくる光景は、水中展ならではの情景である。晴れていたのに、水面のさざ波が作り出す光の環が白い砂の海底にも届き、例えようのない美しさである。竜宮城のようなという形容もあながち大袈裟ではない。今年は、9組の作家が作品を展示したが、その中に、安藤隆一郎氏の「竜宮城」があった。それには、嘉鉄小の児童が作った亀が取り付けられていた。連なった鮮やかな亀が、水の中でゆらゆら揺れる光景がなかなかよい。田島史朗氏が昨年作り、珊瑚を移植してそのまま海底に置いた「結晶」は、今年の6月時点では珊瑚が少し成長していたが、その後の台風で流され、珊瑚は惜しくもとれてしまっていた。氏は今年も珊瑚の生態を踏まえた作品「結晶—かくたるものから—」を設置した。又吉賢昌氏も珊瑚を移植した「未来の玉手箱PART II」を出品。それは巨大なウニのような、針千本のような作品である。メンバーは、そうした試みが実を結び、珊瑚が成長して珊瑚礁が形成されればという幻想を抱いているが、それはまだ夢の段階である。

水中展覧会は、14年前の1997年6月、嘉鉄の隣の集落である蘇刈沖で開催したのが最初で、所と季節を変えて今年は第14回となる(2000年は開催せず)。鑑賞者は年々増えているというが、水中観光船での鑑賞者を含めて数百人といったところであろうか。まだまだ特殊な展覧会という域を出ていないように思われる。しかし、手弁当で参加する若い人が増え、地元の人に定着しつつある情景を目の当たりにすると、その未来の可能性を暖かく見守りたいという思いを抱いて、奄美の海を後にした。

図1

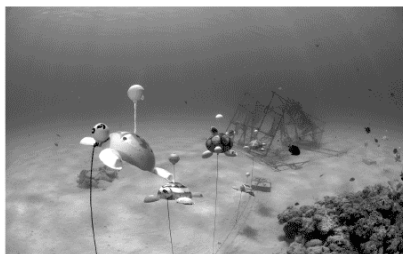


図1 嘉鉄小学生の作品2011

図2



図2 田島史朗「結晶」2010.2011年6月撮影

図3

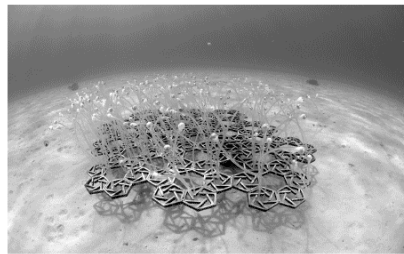


図3 田島史朗「結晶—かくたるものから—」2011

季刊 美のたより No.176

平成23年10月9日

発行 大和文華館